

サイの御教え

一九六八年ダシヤラー祭連続講話⑤ 行者の意

山は太陽に照りつけられても雨に打たれても等しく意に介せず、海と空は嵐にも雲にも動じません。人間だけが心配と恐怖に陥るといのは、おかしなことです。鳥や獣は明日のために食べ物や蓄えることをせず、それを恵んでくれた自然の摂理へと残しておくことに満足しているというのに、人間だけが一日中そのために計算したり貯め込んだりしているといのは、理に反していません。自分の食べ物や育てようと大地に種を蒔く鳥はいません。土地を耕して困いをし、「これは私のもの、これは子供のもの、これは孫のもの」と主張する動物はいません。ニシカーマカルマ（無私的行為）は、神の子、すなわち不滅なる者の子孫にとつて、自然な行動の姿です。彼らは歌い、泳ぎ、踊り、潜り、話し、歩き、祈り、切望します。なぜなら、そうせずにはいられないからであり、それが彼らの本性でもあるからです。彼らはこれ

から何が起こるかを知りません。それゆえ、彼らは気にしません。結果を予測しません。ものごとを行う時、彼らはただ自分であるのみです。それはサハジヤラクシヤナ（生まれつきの性質）、すなわち天性です。

あなたは、空腹の辛さを感じ、毎回その辛さを減らし、いくらかの時間、行動するために生まれてきたではありません。実際のところ、あなたに空腹が与えられたのは、あなたが成長して知性を伸ばし、究極の目的を発見することができるようになるためです！教育は人生のためにあるのであって、生活のためにはありません！そして、人生は、あなたの始まりから終わりまでを自分の目で見るときの機会です。時計はどれも、時計を作った人と、時計のねじを巻いている人がいて動きます。あなたにも、鍵を持ち、ねじを巻く者がいます。その者を見つけないさい。時計は、必要とするすべての人

に時間を示します。時計は何の見返りも求めず、相手がなぜ時間を知りたがっているのかも気にかけません。時計は、休むことなく、昼も夜も、晴れの日も雨の日も時を刻み続けます。時計のようでありなさい。

神との友情と親近感を育みなさい

あなたは、フットライトの前にいる舞台上の役者にすぎません。劇を知っていて、役を割り当て、合図を出し、あなたを呼んで舞台上に上げる監督である神は、幕の後ろにいます。あなたは操り人形です。糸を操っているのは神です。

もし神を見なければいけないのであれば、神の友人サキヤか親族バンドウにならなければなりません。単なる傍観者であるならば、神に近づいて神の聖なる仲間になる資格は与えられません。愛と献身的な奉仕の姿勢によって、神との友情と親族関係を育みなさい。もし妻や子供のために王に仕えているならば、あなたがいくら苦労してその奉仕を成し遂げようとも、あなたは王に尽くしているのではなく、妻子に尽くしていることとなります。ですか

ら、もしあなたが、家族の安楽を保てることができるようにと、物質的な繁栄を求めて儀式礼拝をしたり誓願を守ったりしているのであれば、それはあなたの果報に向けてではなく、家族に尽くし、家族に身を捧げていることとなります。まっつきま主託しよと穢けがれなき献身——これが、神が課して、受理する、辛辣なテストです。

ある男に三人の妻がいるとします。男が死ぬと、三人は皆未亡人になり、喪服を着て、宝飾品をはずし、喪章を付けなければなりません。それが慣習です。「インドには未亡人になると白い無地のサリーを着用して質素な装いにする伝統がある」けれども、その時妊娠していたら、この慣習は適用されません。未亡人になったことを公表するのは、子供が生まれた後でよいのです！それまでの間、本人は自分が未亡人だということを知っていますが、世間は彼女を見て夫が生きていると思うでしょう！これは英知者グニヤニの場合も同様です。英知者グニヤニは、この世は一時のものだということ、すべては神だということ、そして、神に行いを捧げることこそが自分を輪廻から救ってくれるということを知っています。しかし、世間は彼を見ても、彼は自分たちと同じような人間だと思

ます！英知者^{グニャーニ}は水の上で咲く蓮の花のような存在です。蓮の花は、水の中で成長して泥の中に根を張りますが、水にも泥にも触れず、どちらにも影響されません。

神を知るための苦しみは誇るべき宝石

英知^{グニャーナ}は普遍なる絶対者（パラマトマ）の一属性ではありません。英知はパラマトマそのものです。ウパニシャッドは、「真理^{サツテイアム}と英知^{グニャーナム}と無限はブラフマンなり」と断言しています。英知^{グニャーナ}は成就であり、ゴールであり、完成です。英知がなければ、人は、いくら他の業績で飾り立てても不完全なままです！神を知りたい、神の全能を知りたい、神の神秘を知りたい、という切望と苦しみと努力は、誇るべき宝石です。神は内在者であって、人々が感じ、考え、行うことのすべて、献身する力を全託しようというインスピレーション、神の目的のために神の手の中の道具になりたいという熱望のすべては、神が促し、実行しているのだ、という意識が、英知^{グニャーナ}なのです。

満足は最も貴重な宝

強力な軍隊を率いて、隣国に向かって国境の雪山を越えて行く王がいました。雪深い道の途中、王は、托鉢僧か苦行者らしき男が、山の峰と峰の間から吹いてくる冷たい風から身を守るために膝の間に頭を入れて、むき出しの岩の上に座っているのを見ました。その男は何も着ていませんでした。王は、いてもたってもいられなくなり、自分のシヨールとコートを脱いで、そのヨーギ（五感と心を征服した行者）に差し出しました。ヨーギは受け取るのを断って言いました。

「神は私に、暑さ寒さから身を守るに十分な服を与えてくれました。神は私に必要なすべてを与えてくれます。その服は誰か貧しい人に与えてください。」

王はその言葉に驚きました。王は男に、その衣服はどこにあるのかを尋ねました。ヨーギは答えました。

「神御自身が私のためにそれを織ってくださいました。私は生まれた時から着ています。そして、死ぬまでそれを着ているでしょう。それはこれ、ここにある私の皮膚です！そのコートとシヨールは、誰か物乞いか、貧しい人にあげてください。」

その男より貧しい者などいることかと、王は頬をゆるめました。王は男に尋ねました。

「しかし、そのような貧者はどこで見つけられますか？」

ヨーギは王に、どこに、何のために行くのかを尋ねました。

「私は、敵国を我が国の領土に加えることができるよう、進軍しているところです。」

今度はヨーギが微笑んで言いました。

「もし自国に満足せず、あと何平米かの土地を得ようと、自分の命と、そこにいる何千という命を犠牲にしようとしているのなら、あなたは明らかに私よりはるかに貧しい人です。ならば、その服はあなた自身に供しなさい。あなたは私よりずっとそれを必要としています。」

それを聞いて、王は大変恥じ入りました。王は富と名声の無意味さに気づいたのでした。王は、己の貧しさに対して眼を開かせてくれたそのヨーギに感謝して、自国へと戻りました。満足こそが最も貴重な宝であるということに、王は気づきました。偉大な人は、自らの行いと言葉の一つひとつによって、英知の光を広げます。もちろん

ん、人は真と非真を見分けるために、自分の分別と高い判断力を用いなければなりません。

たゆまぬ実践だけが

恩寵という報いをもたらす

街で宗教的な説法が行われると、すべて必ず参加する一人の老いた商人がいました。中でも、音楽付きの説法にはとりわけ熱心でした。三十年間、彼はただの一度も説法の機会を逃したことはなく、人々はその商人の堅固さと信仰深さに驚いていました。ある日、彼は十六歳になる息子を連れて説法を聞きに行きました。その日、^{バンデイト}学僧は聖牛の話をし、聖牛は人にとって、母なるヴェーダ、母なる大地、生みの母に続く、第四の母であると語りました。雌牛を敬い、たとえ怒りたくなるようなことがあっても、ほんの少しも悪く扱ってはならないと、学僧は聴衆に訓戒しました。

翌日、商人は急な仕事でよその村に行かなければならず、息子に店を任せて出かけて行きました。昼前、一頭の雌牛が店に入ってきて、息子が腰掛けていた椅子の周

りに置いてあった口の開いた容器から、穀物や椰子糖、その他の品々を、大きな口でおいしそうに食べ始めました。牛は神聖なもので、息子は指一本動かしませんでした。夕方、父が帰ってきてその損害状況を見ると、息子を厳しく叱りつけました。

「あんな説法を心に留める必要はない。説法の間を離れる時には、自分が座っていた絨緞の埃を払うのと一緒に、自分の頭から学僧が説法で話した理想を振り落とさなければいけないのだ。もし私が三十年間、毎回これをしていなかったら、お前も私も、家族全員、飢え死にしていただろう。」

捨離はゆつくりと育つ植物です。鞘ができたと期待して若木を引き抜けば、失望することになるでしょう。それと同じく、長い、たゆまぬ実践だけが、恩寵が与えられる平安という報酬をもたらすのです。

神は純粋な努力こそを喜ぶ。

クリシュナがギーターの中で断言しているとおり、恩寵は全託によって得られます。ギーターが、すべてのダ

ルマを放棄せよと指示する時、それは、すべての行いも放棄するようになると言っているではありません。つまり、あなたは行いをしなければならず、そして、あなたがそれを神のために、神を通じて、神によって行った時、ダルマは問題ではなくなりません。その行いは容認されるものとなり、必ずやあなたに利益をもたらします。あの言葉は、不道徳や完全な無活動への招待状ではありません。あれは、人の中にいる至高者、すなわち神に対する、献身と全託を呼びかけているのです。

かつて、あの指示は善悪を識別する必要性を取り去るものだ、と言った邪悪な論評者がいました！おそらく同じ人物でしょうが、その人はこのようにも言いました。「主はギーターの中で、神は葉、花、果物、少しの水を捧げられたら喜ぶであろうと述べています。さて、この水煙管には、その四つすべてがあります。煙草の葉、燃え殻が作り出す赤い花、管のココナッツの実、煙がブカプカと沸き立つ水！」

無礼と屁理屈が、神の目から不敬を隠すことはできません。

主は厳密な学術的解釈によつては、動かされません。神は、実際に実行すること、純粋な努力、ひたむきで誠実な奮闘、心を浄化しようと疲れ知らずで精進することをこそ、喜びます。ゴールにたどり着くまで、その奮闘は油断なく活発になされなければなりません。ある人がラマナマハリシに尋ねました。

「私はどのくらい長くディヤーナ〔瞑想・坐禪〕をすればいいのでしょうか？」

ラマナマハリシは答えました。

「ディヤーナをしているということを全く意識しなくなるまでです。」

ここにいる男子たちが演じた「ドルヴァ」の劇の中で、ドルヴァを演じた少年は真直ぐ背筋を伸ばして座り、我を忘れてディヤーナをしていたかのような印象を与えました。けれども、そのような演技で報酬を要求することはできません。本当のディヤーナでは、あなたはしばらくすると「自分はディヤーナをしている」という意識を超越します。実に、人生のすべての瞬間がディヤーナの瞬間であらねばなりません。それが最高の生き方です。

あなたの部屋をきれいに掃く時には、自分のハートも

同じようにきれいにしなければならぬと、自分に言いかけなさい。野菜を切る時には、欲望と貪欲も同じように切り刻まれなければならぬのだと思いなさい。チャパティの生地を伸ばす時には、あなたの愛の円がどんどんと広がって、見知らぬ人や敵対する人たちにまでも拡大していくことを欲しなさい。

これらの方法によつて、あなたの家庭をアシラムに、日々の生活の繰り返しを解脱へと続く道にすることができま

一九六八年九月二十九日

ダシヤラー祭

ブラシャーンティニラヤムにて

Sathya Sai Speaks Vol.8 C37